

---

# 俺と半透明な彼女の日常

アルト

---

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

## 注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

### 【小説タイトル】

俺と半透明な彼女の日常

### 【Nコード】

N1465BA

### 【作者名】

アルト

### 【あらすじ】

これはどこかの町のどこにでもいるような大学生のお話。

その大学生、名を長門宗助と言うのだが、彼には人には言えない秘密がある。見える人、いわゆる霊能力者と呼ばれるこの世ならざる存在を見て、聞いて、感じるこの出来るこの現代では人々が失った力を持つ希少な存在だった。

そんなある時色々な事情により宗助は亡くなった祖母から譲り受けたとある屋敷に住む事になったのだが、まさか新しく住む事になった家に鎖に繋がれて成仏出来ない幽霊がいるとは予想さえつかなか

った。

「お、お帰りなさいませご主人様！」

「誰がご主人様だ！」

これは見えちゃう人、長門宗助と成仏出来ない幽霊、葉月のちよつとした日常のお話

## シーン0 始まりの始まり

俺と半透明な彼女の日常

### シーン0 始まりの始まり

この世には二つの存在がある。一つは普通に生活し人と会話し何かを思いそれに準じて生きている者、もう一つはすでにその役目を終え旅立つべき者であるがこの世に未練を残し、旅立つことが未だ出来ずにいる者の二通りの存在がいる。

すなわち、幽霊と呼ばれる存在だ。

この者達は普通の人々には見ることも触れることも感じることも出来ない。まだ人間が彼らのことをよく理解しているときにはそれが当たり前だったらしいが、今ではその力の片鱗すら見ることは出来ない。

しかし、ごく稀にその力を今でも行使することが出来る人間がいる。それを人は霊媒師または、霊能力者と呼び崇め時に恐れた。

今、この話の主人公でもある、長門宗助の前にもそのこの世ならざる存在、いわゆる幽霊と呼ばれる存在が目の前にいた。宗助もまたこの時代には珍しい霊能力を持った貴重な存在ではあるが、その宗助はたった今目の前で起きている現状に困惑を隠せなかった。

目の前には確かに幽霊と呼ばれる存在がいる。しかし、その幽霊は宗助が今までに見たことがないぐらいに奇妙だった。

年は16、7ほどの少女、髪は長く腰の辺りまで伸ばされた黒髪はその毛先までもつややかに光っていた。服装は彼らによって様々だったが、なぜか目の前の彼女は巫女服を纏い、どういいうわけか左足には罪人が着けるような足枷と見た目からして重厚な鎖がついて

いた。しかし、その鎖も足枷からわずか30センチほどのところで断ち切られており、すでにその役目を終えていた。

ちなみにはあるが、宗助が困惑しているのはその幽霊少女が原因ではない。もちろん、彼女を最初に見たときも困惑を隠せなかったが、今の宗助はそれ以上に困惑していた。

「……ところでお前は何をしてるんだ？」

「おはようございます宗助さん。もう少しで出来上がるのでもうちょつとだけ待っていてくださいね」

「いやそうじゃなくて……」

宗助はそれ以上言う気にはなれなかった。のほほんと返す彼女に対して宗助はなんでこんなことになっているのだろうか？ と首を捻る他なかった。

幽霊少女こと名を葉月という見目麗しい少女（幽霊だが）は鼻歌を歌いながら上機嫌に朝食を作っていた。ただ、目の前のそれは明らかに朝食と呼べるものかは疑問だったが。

「今日はですね〜じゃーん！ パンケーキです。おいしそうですね〜朝から頑張っちゃいました」

「確かに頑張ったみたいだな。ただな、一言だけ言わせてくれ」

宗助はそつとため息をつきながら目の前の現状に頭を悩ませる。

「いくらなんでも作りすぎじゃないか？」

ダイニングテーブルのそばに置いてある椅子に腰を下ろしながら言う。テーブルの上に置かれた皿にはパンケーキが乗っかっている。それも一枚や二枚じゃない。軽く見積もって十枚はある。それも一枚の皿に対して十枚だ。そしてそれがどうやら一人分らしい。

漫画や何かでこんな光景を目にしたことはあるが、実際に目にしてみると、なんとというか……

「えへへ〜宗助さんに喜んでもらえて光栄です〜」

「……喜んでねーよ」

「あつ！？ もしかして量が足りなかったですか？ じゃあすぐに追加を……」

「……朝からこんなに食えるかって言いたいだけだ。……つたく、家にあつた小麦粉全部使いやがって。卵も……買ってきておかないとな」

「何を言うのですか、糖分は脳を働かせる栄養源としてとっても重要なんですよ。葉月はですな少しでも宗助さんのことを思つてと……」  
「ああ、そうかい、それはありがとよ。でもな、物には限度つてものがあるんだ。でもなこれはいくらなんでもこれは多すぎだろ」

宗助は朝からげんなりした。どうにも葉月はいつも想像の斜め上をぶつちぎって行動する癖がある。放置しておくで大抵ろくな目には遭わないことを宗助は彼女とのそんな短くもなく、かといってそれほど長くもない同居生活で学んでいた。

はあ……と、ため息交じりに何かを諦めた様子で宗助は冷蔵庫からいつもの通り牛乳を取り出すと、キッチンの棚に置いてあつたカップになみなみと注ぐ。幸いにも牛乳だけはなんとか残つていたみたいで、それを飲み干すと低血圧な頭がようやくはつきりとしてくる。横では「ぐす……宗助さんに喜んでもらえると思つて頑張つたのに……」とへこんでいる幽霊一名がいるが、出来るだけ気にしない様にしながらやり過ごそうとする。

しかし……今日の朝食は牛乳だけで済まそうとしている宗助をよそに葉月は目の前に積まれたパンケーキを食べながら「……おいしいです……やっぱりパンケーキはいいですね……ハチミツもたっぷりかかつて甘いはずなのに……あれ？ どうしてでしょうか……このパンケーキしょっぱいですね……もしかして、砂糖と塩を間違えたでしょうか……ぐす……」と、明らかに宗助に聞こえるぐらいの声で呟いていた。白々しいことこの上ない。そんな葉月に宗助は内心、うぜえ……と、思った。

未だぐすぐすと鼻を嚙りながらパンケーキをちびちびと食べる幽霊を横目で見ながらため息一つ、そしてとうとう宗助は観念した。正直に言えば幽霊相手に慰めの言葉なんているのか？ なんて思いはしたが、どうせ放っておいてもろくなことにはならない。仕方無

しに頭に手を置いていつものように言ってる。

「……葉月、俺が悪かった。そうだな、葉月はこんなに頑張ってくれたんだな。ありがとう。さ、俺もパンケーキが食いたかったんだ。冷めないうちに食べようか」

宗助としては大して感情もこもっていないただの棒読みの台詞を並べ立てただけだったのだが、葉月にとっては効果覲面で「あう、宗助さん！ はい、食べるです！」と言うと、葉月はずーんと落ち込んだ表情から一転、枯れた大地に太陽が刺したような顔をする。ウキウキとテーブルについた。まさにウキウキウツチングだ。それを見て宗助は「朝から面倒くせえ……」と、呟いた。

ちなみにだが、この話の主人公でもある宗助がこんな目に遭っているのには少なからず理由があった。それを事の始まりなんていうと格好よく聞こえる気もするが、宗助がこんな目に遭う要因となったことを考えると、実際にはそんなにも格好のよいものではなかった。今にして思えばあれ自体も何かの陰謀として捉えることが出来るのかもしれない。それぐらいに奇妙だった。

出来すぎた出来事に関して人というものは必ず何かの理由をつけたがるものだが、今の宗助の日常は側から見れば偶然起きた出来事だおといえる。しかし、どう考えてもやはり何らかの理由をつけたくなる。そんな哲学的なことを思いながら宗助はここに引越してきたときのことを思う。

「宗助さん、コーヒー淹れましたから飲んで下さいです」

「ああ、ありがとう」

「どうしましたか？ なんだか難しい顔をされてますけど、もしかしてコーヒーよりも紅茶のほうがよかったですか？」

葉月は何か自分が粗相をしてしまったような顔をしてあわあわしていた。

「気にするな、別にお前が何かしたわけじゃないんだ。ただ、俺自身こんな目に遭ってるというのに意外と冷静でいられるもんなんだなって関心してただけだ」

「？」

目の前の幽霊は不思議そうな顔をしていたが、気にせずに出されたコーヒーに口をつける。相変わらずこの幽霊のいれるコーヒーは普段自分で淹れるものより美味かった。前に気になったので美味しさの秘密なんかを聞こうと思ったら、「そんなの簡単ですよ。宗助さんへの愛がこもっているから美味しいのですよ」なんてことをぬかしてきたのでその日は一日中無視を決めこんでやった。さすがに、葉月も堪えたのか翌日には華麗なる土下座を決めて謝ってきたが、

宗助と葉月は一応は同居という形でこの家に一緒に住んでいる。元々は誰も住んでいなかった家に引越してきた宗助だったが、まさか新しく住むことになった家にこんな変なのがいるとは想像もしなかった。

宗助は霊能力者だ。とは言ってもこの世ならざるもの、いわゆる幽霊と呼ばれる存在が見える程度のもので俗に言う除霊といった類のことは出来なかった。それは霊媒師でもあった宗助の祖母ならば出来たのだが、宗助にはその力は引き継がれなかった。そのせいで幼い頃からこの世ならざるもの達から度々襲われることになったり、現世に生きる者達から気味悪がられることも一度や二度ではなかった。だからというわけではないのだが、出来るだけそういったことには関わらないようにしてきた。それが宗助が幼いなりに身につけた処世術だった。

しかし、やはり宗助に流れる血はそういった存在を惹きつける何かがあるようで、こうしてなし崩し的にはあるが幽霊と一緒に住むこととなってしまっている。

「お、お帰りなさいませご主人様！」

「誰がご主人様だ！」

なんて会話にすらなっていないその会話が彼女と交わした最初の言葉だった。それもなんだか懐かしい思い出のようにも感じる。

「宗助さん宗助さん、今日は葉月が一位ですよ！ なにかいいことがあるかもです！」

「……そうですね」

葉月はテレビの占いに喜びながら鼻歌交じりで上機嫌にしていた。これはそんなちよっとだけ不思議な（いや、やっぱり結構不思議な）幽霊とその幽霊に振り回される主人公のお話。

## シーンの 始まりの始まり（後書き）

見えちゃう人の宗助と成仏できない葉月の少しだけ非現実的な日常  
をお楽しみください

## シーン1 未知との遭遇

### シーン1 未知との遭遇

「……本当にここで合ってるのか？」

男は心配そうに呟いた。

手にはこの情報社会にとってはゴミくず以下の代物でしかない地図（小学生にはじめてのおつかいをさせるために母親が書いたような地図であまりにも簡略しすぎて地図とは呼べない）とこの家の鍵が握られていた。

辺りを見回せば建てるのに一体いくら位かかるのだろうか？ と言いたくなるようないわゆる、豪邸と呼ばれるような大きな家がある。こら中に乱立していた。

高級住宅地ということもあり、大きな塀とその中にいる大きな犬、どこの国の車かは知らないが明らかに高級車だと見た目でわかる車が何台も止まっている豪邸をいくつも見る。あるところにはあるんだなと関心しつつ、この国の富裕層と貧困層の格差を見たような気がした。

それにしても……だ。

「確かに屋敷と言えば聞こえがいいが……これは……」

彼の目の前には確かに高級住宅街らしく、それなりに大きな家が建っていた。そう、大きさだけでいえばの話だが。

無駄に大きな塀には絡みついた蔦が塀を覆いつくし、広々として綺麗だった庭は放置されて草が生え放題、真っ白い家は風雨にさらされたせいで白というよりは灰色に近い色に変化していた。

一言で言えば、廃墟。または幽霊屋敷というのがぴったりな外観だった。

「幽霊屋敷だよな……」

天の声が聞こえたのかどうかは定かではないが、どうやら彼、この話の主人公長門宗助も同じ思いだったようだ。

「……今ならまだ引き返せるか？」

そんなことを思いはしたが、残念ながら今の彼にはその選択肢はなかった。

宗助がこの古ぼけた屋敷にやってきたのはある理由からだった。

先日、宗助の祖母が亡くなりその際に財産分与が行われた。生前、宗助の祖母は残された家族に遺言を残しており、孫である宗助にはなぜかこの屋敷が与えられたのだった。

当初、宗助はこの屋敷を相続するのを断ろうと思っていた。しかし、この屋敷が建っているのは偶然にも宗助が通う白峰大学の近くなのと、実家に帰っていた際に借りていたアパートが全焼してしまふという不幸が重なったために仕方なくこの屋敷に住むことになったのだった。

話に聞いていたときはちゃんと管理してある屋敷ということだったが、実際に実物を見ていなかった故の多少の不安はあった。しかし、これはその多少の不安というものを遥かに逸脱していた。

しばらくの間逡巡を繰り返していたが、ついに意を決したようでは扉に備え付けられてる鉄格子をそつと押すと、錆びて朽ち果てている割にはすんなりと開いたことに驚きながらも中に入ってしまった。

扉から家までのわずか数十歩のところには石畳が敷かれており、この住宅が元々はそれなりに素晴らしい住居だったことを感じさせた。石畳のおかげで草をかき分けながら進むということはなかったが、外観から見てもあまりよろしくはない。どうやら草むしりをするのは必至だった。

家のドアの前に立つと、ドアには何かの装飾だろうか？あまり芸術だとか美術的センスはない宗助にも匠が彫ったとわかるような彫刻が施されていて、この家の元々の高級感（今は見る影もない）を感じさせていた。

ポケットから鍵を取り出すとそれをドアノブの下にある鍵穴に差

し込む。鍵自体も年代物のようで今のご時世それこそプロの方ならわずか瞬きする間に開けてしまいそうなくらいにセキュリティーとは縁遠い構造だった。

カチャ、と小気味のいい音とともに長い間かかっていた封印を解くかのように鍵が開錠される。ギイイ、立て付けの悪い建物のような音を出しながらドアを開くと中は埃塗れの様相か？ と想像していた宗助の予想を見事に裏切り、意外にも中はとても綺麗に掃除されていた。

それこそ、ついさっきまで誰かが住んでいたかのように……。

一抹の不安を、持ちつつも中に踏み入れる。広々とした玄関は、靴を脱ぐスペースというものがないらしく外観同様洋風の家にといた造りとなっていた。日本人である宗助には靴を脱いで入る習慣があつたため、やや戸惑い気味ではあつたものの、初めて入る家に靴を脱ぐのも嫌だと思つていたのでこれはこれで都合がよかつた。

玄関からまず最初に見えるのは広々としたロビーのような場所だった。一軒家なのにロビー？ なんて思つたが実はそこがリビングルームだった。備え付けられたソファは革張りで、どこかが破けているなどの欠点もないただただ綺麗に手入れをされているものだった。

さすがに電化製品なんかの類はなかつたが、家具なんかはそのまんなまになつていようでソファの他には大きな古時計とちよつとした机が置いてあつた。それらもソファ同様、壊れているとか埃が被つているということもなく、いたつて綺麗に手入れされていた。吹き抜けになつていりリビングの天井は高く、そこからベランダのようになつていり二階部分の部屋らしきドアが三部屋分見えた。

改めて、この家の見取り図を眺めるとよくわかるが、宗助が今いるリビングからさらに奥に進むと、ダイニングとキッチンがあるらしく、その横には風呂とトイレが備え付けられていた。そのダイニングから別の通路がありそこに対面するように二つの部屋が設けられていた。広さはいずれも六畳とまるで使用人の部屋のような造り

になっていた。

部屋の中には作業机とクローゼット、それとベッドが同じ配置でそれぞれの部屋に置いてあった。わかりやすく言えばビジネスホテルの部屋のような感じだ。

吹き抜けになっていてリビングから二階に上がれる階段があり、そこから上に登るとリビングが一望できる。そして、そこに等間隔で並ぶ部屋があり手前から十畳の部屋が二つと一番奥の部屋が二十畳となかなか広い部屋になっていた。

十畳の部屋には同じくベッドと机、クローゼットがありここも下の部屋と同じように最低限生活に必要な家具が揃っていた。違つとすれば部屋の広さぐらいなものだろう。ちなみに二階、一番奥の二十畳の部屋はどうやら書斎だったらしく、窓際にはゆっくりと腰を落ち着けて本を読むための机とイスが置かれており、壁一面に置いてある本棚の中にはぎっしりと詰まった本があった。ちなみになんてこんな場所にあるのかは不明だが、正しいメイドのあり方、ご主人様とお付き合い第一章、第十三章、お兄ちゃんと呼ばせて、尽くす女になる！！なんて誰が読んでいたのかわからない本が、厚みがあり羊皮紙や革張りの装丁といったかなり高級そうな古書と同じように並んでいた。補足だが、ご主人様とお付き合い第一章、第十三章の間の第八章だけがなかった。誰かが持ち去つたのだろうか？

「……まさか、な」

宗助が言つたまさかというのは先日亡くなつた祖母のことだ。さすがにそれはないと思うが……。

一通りぐるりと回つてみたがどこもおかしな点はなかった。電化製品のほかにガスコンロや食器などのいわば消耗品に近いものはなかったが、机やベッドなどの大事に使えば長く使える家具はまるで宗助の為に用意されていたかのように置かれていた。それもまともな姿かたちで。

管理されていた。というのは宗助がこの屋敷を相続した際に聞いていた。だから、家具なんかがちやんとした形で残つていたのはわ

かる。しかし、不思議なのは管理している人間がいるならば、外の状況はどうだろうか？

ちゃんと管理しているならば外の庭だってきれいに掃除されていてもおかしくはない。

それにおかしなことはそれだけではない。

「……なんで管理している人間がいないんだ？」

何気なく思ったことだったが、どうにも不自然すぎる。家族はこの屋敷の存在のことはよくは知らないようだった。祖母が残した遺言には“この屋敷には管理している者がいる。詳しくはその者に聞け”としか書かれていなかった。鍵はその遺言とともに残されていた。

鍵は宗助が持っている一つしかない。

では、誰がこの家の管理をしている？

「……どういうことだ？」

ますます謎は深まるばかりだった。

考えていても仕方ない。とりあえずはこれからの生活に必要なものを買い揃えなければならぬ。それに外の草むしりやこの家の掃除も必要だ。中のほうはきれいに掃除されているが、外のほうは手付かずだった。

「さて、と」

そうと決まればあとは動くだけだった。まずはこの家の管理人を探すことにしよう。

宗助はこの家に入ったときから薄々と感じていた。この屋敷に存在する管理人の存在を。

「おい、この家にいる管理人とやら、俺の声が聞こえるか？俺は長門宗助、長門雪の孫にあたる人間だ。俺の祖母さんは先日死んだ。それで俺がこの家に新しく住むことになった。もし聞こえるなら姿を現してくれ」

誰もいない家に宗助の声だけが響く。側から見れば何をしているのか？と言われそうだが、宗助には人には言えない秘密がある。

この世ならざるもの、つまりは幽霊と呼ばれる存在を見て彼らの声を聞いて彼らの存在を感知できる能力。普通の人間には備わっていない能力を持つもの、霊能力者だった。

宗助がこの世ならざるものとのコンタクトを図ろうとしたが、相手のほうは聞こえているのかどうか知らないが、宗助の呼びかけには答えなかった。代わりにパシィ！ という派手なラップ音が返事の代わりに言いたげに鳴り響いた。

「そうか、そっちがその気なら構わない。ならば俺にも考えがある」  
宗助は仕方ないと首を振ると一目散に二階のとある部屋へと駆け上がった。

コンコンと念のたドアをノックする。もちろん相手から返事などあるはずがない。

「結構強情な奴だな。ま、幽霊の考えていることなんか俺にはわからないし、わかりたくもないがな」

一人呟きながらドアのノブを捻る。

「やっぱり開かないか」

ここは先ほど宗助が家の中を探索していたときに唯一、ドアが開かなかつた部屋だった。そして、先ほどから感じている気配もこの部屋から強く感じられた。

となれば、管理人とやらがいるのはこの部屋しかない。

に、してもだ。鍵がかかっている部屋にどうやって入ろうか？

幽霊などの類であれば鍵がかかっているようにいまいとドアをすり抜けて入ることが出来るが、宗助には無理な話だ。いくら霊能力者だといっても、自身が透明になれるわけではない。

外側から窓を突き破って進入するか？ バカを言え。そんなのは映画の世界だけで十分だ。ましてや、引っ越してきて早々、家の修理なんてまっぴらごめんだった。

「……と、なると」

後の答えは簡単だった。

ドンッ！！

「ちいつ、そんな簡単に開くわけないよな」  
体当たりだった。

この世ならざるもの達が見える宗助ではあったが、別に变身出来るわけでもないし、ましてやすごい技が使えるわけでもない。幽霊が見える以外はごく普通の一般男性なのだ。

何度かドアに体当たりを仕掛けてみるが、ドアはびくともしない。いくら頑張っても開かないドアに苛立ちを覚えながらも一度と思いを起こすが、次第に体力は限界に近づいていた。

ハア、ハア、と息を切らせながら、ふらふらする足をなんとか力で立たせドアの前に立つ。

「ふう よし！」

宗助は柵ぎりぎりまで下がるとこれで最後とばかりに開かずのドアへと突っ込む。

と、その時だった。

「……うん、さつきからどんとどつるさいですう」

「な!？」

「え? ひゃう!!」

眠そうな声が聞こえたと思ったらさつきまでびくともしなかったドアが開いた。しかし、車は急に止まれない。という言葉その身体現しているような勢いの宗助はその勢いを止めることなく……

「……いつつ」

そのまま中にいた人物目掛けてダイブすることになってしまった。ゆっくりと体を起こすと、宗助の体の下には謎の美少女がいた。

艶めく腰まで伸ばされた黒髪、陶磁器を思わせるような、かといつて病弱とまではいかないぐらいの白い肌、見た目は小柄でなぜか巫女服着用。見た目はどこからどう見ても日本人らしい容姿をしていたが、その姿は半透明だった。

明らかにこの世ならざるもの、つまりは幽霊と呼ばれる存在だった。

「おい、大丈夫か？」

「……う、ううん」

幽霊相手に大丈夫か？ もなにもないのだが、このよくわからない状況に気が動転してしまっている宗助はあたかも生きている人間相手に接するように話しかけていた。対する少女は気を失っているのかうなされてるように声をかすかに漏らしていた。

「……どうやら問題はなさそうだな」

少女を押し倒しておいて問題がない訳ないはずなのだが、これは不慮の事故だと思ふこととして片付けることにした。

しかし、このまま放置しておくのも後味が悪い。いくら幽霊とはいえ女の子だ。宗助は未だに目を覚まさない少女を抱えあげるとそのまま部屋の中にあつたベッドの上に寝かせることにした。

それにしてもここは一体？

宗助は少女がいた部屋の中をぐるりと見回してみると、部屋の中にはベッドのほかに机、クローゼット、テレビ（ちなみに薄型でデジタル放送対応だった）などもろもろ生活用品が用意されていた。机の上には書斎にはなかつたご主人様とお付き合い第八章が置いてあつた。どうやらこの部屋にいた少女が読んでいたようだった。

ベッドの上には女の子の部屋らしくぬいぐるみやふかふかした枕が置いてあつた。カーテンも発色のよい薄いピンク色でここが改めて女の子の部屋なんだと認識させられた。

だが、非常に残念なのは、初めて入つた女の子の部屋が幽霊の部屋で、ましてや部屋に入ろうとドアに体当たりをかまし、なおかつ事故とはいえ女の子（幽霊だが）を押し倒してしまふという裁判にかけられたなら間違いなく有罪確定の行為をしてしまったことだった。

ひとしきり部屋の中を物色していると、ベッドに寝ていた少女が少しむずがるような仕種を見せた後、その閉じられていた瞳をゆっくりと開いた。

「ん、起きたか」

宗助の言葉に少女はひとしきり目をぱちぱちさせ、ガバツと起き上がると言、

「お、お帰りなさいませご主人様!!!」

「誰がご主人様だ!!!」

「あうう……ご主人様ではないとすると旦那様でしょうか？」

「……俺はいつからそんなに偉い人になったんだ？」

「じゃあお兄ちゃん？」

「……生憎と俺は一人っ子だ」

なんだか突っ込むのも疲れてくる。それよりも言うことが山ほどあるはずだ。

「というか、知らない男が勝手に自分の部屋に入り込んでたら普通は不審がないか？」

「え？ あ……ど、どちら様でしょうか？」

「……お前は顔も知らない相手にご主人様と言うのか」

なにやら論点がかなりずれてきているが、この際気にしないでおこう。気にするとますますややこしくなりそうだからだ。

やれやれ首を振るとため息を吐きながら宗助は自己紹介を始めた。

正直、宗助の疲労はこの時点でピークだった。

「俺の名前は長門宗助。今日からここに住むことになった」

「あう、長門……宗助さんですか？ となると雪さまと何か関係がある？」

「ああ、俺は祖母さん……長門雪の孫にあたる。ちなみにだが俺の祖母さんは先日死んだ。その時に財産分与で俺にこの屋敷が与えられたというわけだ」

「そうですね……。雪様がお亡くなり……」

目の前の少女は宗助の祖母の死を悲しむと手を合わせてその死を悼んだ。内心、幽霊が死んだ人のことを悼んでどうする！？ なんて思ったが、この際ツッコミはなしだ。

「で、俺の自己紹介が終わったところで聞きたい。お前は誰だ？」

「あう！ そ、そうでした。自己紹介がまだでした！ 初めまして

です！ 葉月は、葉月は……ええ、と……誰でしょうか？

「知らねーよ！！」

「き、記憶喪失です！ どうしましょうか！？」

「……どうしましょうか」

ピークだった宗助の疲労は今や限界突破を果たしすでにクライマックスへと突入していた。

「……というわけです」

「……というわけって……何も説明してねーだろーがあー！！」

宗助はなぜか部屋に置いてあったちゃぶ台をひっくり返して叫んだ。

「ひいいい！ だ、だって、本とかには「……ということだ」とか「かくかくしかじか」とかで通じますですよ。なのにこの世界ではそれが通じないですか！？」

「世界言うな。生憎となこの世の中はそんなご都合主義でなんか出ていないんだよ。で、だ、そんなことはどうでもいい。それよりも、お前は一体誰なんだ？」

「あうう……先ほども言いましたが自分が何者なのか覚えていないんです。一応、名前としては葉月という名前を雪様から頂きました。それ以上のことはなんにも……」

「ふーん、ま、説明はかなり不十分だが大方のことはわかった。それでお前がここにいる理由はどうしてだ？」

「それが……」

と言つて葉月は自分の足についている足枷を宗助に見せた。

「それは？」

「……これが何なのか葉月にもわかりません。気がついたときには足にこれがついていましたから」

葉月の足についている足枷は見るからに重厚で簡単には外れそうには見えなかった。足枷から伸びる鎖はどこにつながっているのかはわからないが、とても長くその先は壁の向こうまで続いているよ

うだった。

「雪様がこのお屋敷をお建てになったときから葉月はここにいます。最初、雪様は葉月をなんとか成仏させようとしてくださいました。この鎖があるから葉月が成仏出来ないとおっしゃっていました。それに鎖のせいでこの屋敷から出ることさえも叶いませんでした。それを知った雪様は葉月のこの鎖を解こうと尽力を尽くしていただきましたが、雪様でもこの鎖を解くことは出来ませんでした。それで行く宛てのない葉月を雪様はここに置いてくださったということですよ」

葉月は宗助がひっくり返したちゃぶ台を直しながら話を続ける。

「雪様は記憶すら失っていた幽霊の葉月をとても大事にしてくださいました。この世の中のことを話してくださいだったり、自身の話もしてくださいってそれはそれは楽しいひと時でした」

葉月は遠い記憶を懐かしむような顔で話していた。宗助はそんな葉月の横顔を眺めながら不謹慎にもその横顔を美しいと思っていた。って何を考えてるんだ俺は……。出来るだけ葉月に悟られないように顔を背けながら葉月の言葉に耳を傾ける。

「しかし、雪様がお亡くなりになられたとは……。先日、雪様が葉月にお別れを告げに来たと言われた時はどういうことかわかりませんでした。そういうことでしたか」

「……大往生だった」

「……きつと最後まで笑っておられたんでしょうね」

「……ああ、最後まで笑っていたよ」

宗助の言葉に「そうですか」と呟くと、葉月は鎖をチャリと鳴らしながら宗助に代わりのお茶を出した。

「それでお前がこの家の管理人をやっているってわけか」

「はい、雪様は大事な用があるからといってこの家を離れることになりました。その時ですが、雪様はこんなことをおっしゃっていました。 “いつになるかはわからないけど、そのうちあんたを成仏させてやる人間が現れる。その時にはそいつとよろしくやりな” って

「どういうことでしょうか？」

「……あんのババア」

「そういうことか、これでなんとなくだが全ての辻褃があったような気がする。つまりは……。」

「してやられたってことか」

「？」

「いや、気にするな」

諦めたように呟くと宗助は葉月の淹れたお茶を飲んだ。

案外、美味い。幽霊の淹れるものだからと不安を隠しきれなかったが、正直、自分で淹れるものより美味かった。

「それでなんですけど……。」

「ん？なんだ？」

「えと、あなた様のことをなんとお呼びすればよろしいでしょうか？」

「どういうことだ？」

「雪様が葉月にお別れを告げに来た際に“近いうちにそこに新しく住人が増えるからその時にはそいつの世話をしやってくれ”と言われまして、その方のお世話をすることというのは私のご主人様になるということですから、お呼びするときはご主人様がよろしいのかと思ひまして。もし、ご希望であれば旦那様やお兄ちゃんとお呼びすることも出来ますですよ。葉月はその為に勉強しましたから」

「なんの勉強だ！？ とは聞かなかつた。机の上においてあったご主人様とお付き合い第八章を見れば大体のことはわかつたからだ。」

「……普通に宗助でいい。様付けもいらない」

「では、宗助さんでよろしいでしょうか？」

「ああ、それでいい」

「わかりました」

言つと、葉月は深々と頭を下げて一言、

「ふつつかものですが、今後ともよろしく願ひします。宗助さん」

「……。」

こうして、宗助は葉月と出会った。

この先、葉月と出会ってしまったせいで宗助の身に色んな災難が降りかかるが、この時の宗助はそんなことまだ知る由もなかった。

「それでは、まずはご主人様にご奉仕を……」

「何のご奉仕だ!」

宗助のこれからは前途多難なようだった。

「宗助さん、洗濯物が溜まっていたら出しておいってくださいね」

「宗助さん、お台所の洗剤が見当たらなかったので帰りに買ってきてください」

「宗助さん、今日は和食と洋食どちらがいいですか?」

……なんだこれは?

宗助の胸に去来したものはこの現状がよくわからないということだけではなく、どうしてこういうことになったのだろうか? という疑問だった。

のんびりとした朝、いつものように規則正しく目覚め「ふわああ」とあくびをしながらリビングのある階下に降りてみると可愛らしいフリルのついたエプロンを着用した(巫女服は標準装備)葉月がパタパタと走りながらもとい、走っているように浮かびながら忙しなく働いていた。

「あ、おはようございます宗助さん」

「おはよう、葉月」

なぜかエプロンを纏っている葉月にそれをどこから用意したんだ? と言いたいのをぐっと堪え軽く朝の挨拶を終えると、「ご丁寧にテーブルの上に置いてある新聞紙に手を伸ばす。」

「相変わらず世の中は平和だな」

そんなことを呟きながらのんびりと朝のひと時を過ごす。  
すると、

「ふん、ふふん、ふーん」

とてもご機嫌な様子で葉月があちらこちらへと駆けていた。

「……」

新聞を読む手を止め、テレビのリモコンに手を伸ばし、いつものようにテレビを点ける。テレビの向こう側では雨の中だというのに満面の笑みを浮かべたお天気キャスターが元気にリポートしていた。「あっちも元気ならこっちも元気だな」

聞こえたのか聞こえていないのか知らないが葉月は「忙しいですね」と言いながら家事に精を出していた。

どういうわけか葉月は幽霊のくせに物に触れることが出来るらしく、雑巾を片手に窓をきれいに磨いていた。宗助の目の前では掃除機が勝手に動いていて、奥のキッチンでは包丁やら食器類が浮かびながらまるで意思を持っているかのように自由自在に動き回っていた。

一言で言えば童話とか絵本の中の世界、現実において考えてみればそんなことが起きるわけではないし、あつたとしてもせいぜい掃除機が勝手に動くぐらいのものだ。

葉月は自分の能力、つまりはポルターガイスト現象を使って家事をしていた。

こんなもの他の人間に見られたなら発狂するか、霊媒師を呼ぶかするものだったが、とりわけ宗助はこういったことに馴れており、それを実行している人間も目の前で忙しそうにしているのを見ているため別段何かを言うようなことはなかったが、やっぱり現実にくういうことを行われると正直どう対処していいものか、という気持ちになった。

「宗助さん、早くしないとご飯冷めちゃいますよ」

「あ……ああ……今行く」

と宗助を呼ぶ声が一つ、

のっそりとソファから立ち上がるとダイニングに向かう。その間にキッチンのほうから腹の空くようないい匂いがこれでもかというぐらいに漂ってきていて余計に鼻腔をくすぐる。

ぐう、となるお腹はとても正直で腹が減っては戦が出来ぬと

いうことを体で表しているかのようだった。

それにしても、どうしてこうなったのだろうか？

まあ、一言で言ってしまうえば自分で同居を認めたのだから彼女に文句を言うのはお門違いだというものだ。それは頭の中でわかるのだがそれにしてもこんな新婚さんみたいな状況になるなんて思っても見なかった。

「宗助さん、今日はいいい天気になりそうですね」

「……」

「あ、宗助さん、今日のは腕によりをかけて作ってみました」

「……」

宗助は黙る他無かった。

とりあえず、文句というか言いたいことは山ほどあった。ただそれを言ってしまうと機関銃のように溢れ出すのは一目瞭然なものと、せつかく作ってくれた朝ごはんが冷めるのがいやだったのも手伝ってそれを言うのをぐっと堪えた。

が、

「はい、宗助さんはご飯これぐらいでよかったですか？」

「……ああ」

何気なく返事をしてしまったがそれを流してしまうほど宗助は甘くは無かった。

「なあ、ちよつといいか？」

「はい、なんでしようか？」

「色々といいたいことがあるんだが、きつとそれを言つとキリが無  
いから敢えて一つだけ言わせてくれ」

「はい？」

「何やってんだ？」

「え？ ご飯を盛り付けてますど……あ！ も、もももしかして、朝はパンのほつがよかったですでしょうか？」

「いや、俺はご飯派だ。じゃなくって、なんでこんなことをしてるんだ？と俺は言いたいんだ」

「え？ 何か粗相をしましたでしょうか？」

「粗相もなにも、お前は幽霊だろう。なんでこんなことをしてるんだ？」

その宗助の質問に葉月は返答に困っているようだった。

「第一、俺はこんなことをしてくれと頼んだ覚えはないし、される理由も無い」

「はうろうう……」

葉月は目に見えてわかるほど落ち込んで見せた。そんな姿に少し罪悪感を覚えはしたものの、それでもなんでこんなことをしているのがまったくわからない以上追求の手を緩めることは出来なかった。

「何でだ？」

出来るだけ優しく言っているつもり（本人はそう思っている）だが、側からみればどこからどう見ても一方的に尋問しているようにしか見えない。

「……宗助さんはこういうのはいやですか？」

「は？」

「いえ……せつかくこうしてお側に置いていただいているのに何もしないわけにはいかないと思ひまして、こうして宗助さんの身の回りのお世話をさせていたたくことでご恩返しをと思ひましてです」

「ご恩もなにも成り行きでこうなっているわけなんだから別に普通にしててもいいと思うぞ。それに俺はこういうことをされなくても大抵のことは一人で出来るし、お前だつていやだろ？」

「え？ い、いえそういうことはないですけど……」

「俺の祖母さんが俺の為に世話をしてくれって言い残したのかもしれないけど、別に俺はそこまでしてもらうことはない。それにお前との付き合いもその鎖が外れるまでだしな」

「そうですね……」

殊更寂しそうに宗助のご飯をそつと置くと葉月はその場だけに影

が差したかのようにずーんと暗くなった。

「……」

「……」

「……」

「……」

「あのさ」

「……はい」

「そこでそんな風にされているとご飯が食べ辛いんだが……」

「……いえ、葉月のことは放って置いてください。葉月のことはいないものと思つて食べてください。あ、でも、幽霊なんだから最初からいないも同じですよ。あはははは……」

「……」

ずず、と味噌汁をすする音だけが響き、この場が明らかに尋常じやないくらいに静かだということを知らしめられる。

葉月は葉月で「葉月なんてただの幽霊ですから……」気にしないで下さい……」とぶつぶつ呟いているし、対する宗助は出来るだけ気にしないようにご飯を黙々と食べようとする。

そうすること五分、もちろん、二人の間に会話なんて無い。

宗助は温かいご飯食べながら思った。

面倒くせえ……と、

しばらくお互いに黙っていたが、この現状に耐え切れなくなった宗助が観念したかのように首を振った。

「ああ、わかった、お前のしたいようにすればいい。俺もこれ以上は何も言わない。ま、お前とのこの生活もその鎖がなくなるまでだ。それまでは好きにすればいい」

「ほ、本当ですか!? 宗助さん!!」

「ああ、だが、その鎖がなくなるまでだからな!! わかったか?」

「はい!」

どこからどう聞いてもぶっきらぼうな言い方にしか聞こえない言い方だったが、葉月はそれをまったく気にすることも無くぱつと顔

を上げるとまるでお日様が差したかのように明るい笑顔を取り戻していた。

本当になんか調子狂うな……。

宗助のそんな思いは温かい味噌汁と炊き立てのご飯を前にすると知らぬ間にどこかへ消えてしまった。

## PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になるうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能<sup>たんのう</sup>してください。

---

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。  
<http://ncode.syosetu.com/n1465ba/>

---

俺と半透明な彼女の日常

2012年1月3日23時45分発行